



令和7年7月11日

三豊市議会議長 丸戸 研二 様

教育民生常任委員長 湯口 新

委員会調査報告書

本委員会に付託された事件について、調査の結果を下記のとおり会議規則第110条の規定により報告します。

記

1 調査事件

高知県香美市

『国際バカロレア教育の取組みについて』

2 研修者

委員長 湯口 新

副委員長 瀧本 哲史

委員 金子 辰男 浜口 恭行 水本 真奈美

石井 勢三 近藤 武

事務局（随行） 織田 健太

3 調査経過及び概況（別紙1のとおり）

4 委員所感（別紙2のとおり）

高知県香美市

- (1) 日時 令和 7 年 5 月 2 9 日 (木) 午前 9 時 3 0 分から午後 3 時まで
 (2) 調査案件 『国際バカロレア教育の取組みについて』
 (3) 対応者

高知県香美市立大宮小学校 校長 森田 卓志

高知県香美市立香北中学校 校長 坂下 佳総 他教諭

(4) 調査の経過

大宮小学校 1 階及び香北中学校 2 階において、香美市議会議長の挨拶、市立大宮小学校の森田校長、市立香北中学校の坂下校長及び湯口委員長の挨拶の後、両校長及び担当教諭より国際バカロレア教育の取組みについて説明を受けた。その後、質疑応答を行い、最後に瀧本副委員長よりお礼の挨拶を行い、視察を終えた。

(5) 調査の結果

大宮小学校では令和 3 年 1 月に、香北中学校では令和 4 年 1 2 月に、ともに全国の公立学校では初めて国際バカロレア機構から PYP (プライマリー・イヤーズ・プログラム) 及び MYP (ミドル・イヤーズ・プログラム) の IB ワールドスクールに認定された。

大宮小学校では、PYP の理念に基づき、探究を中心とした授業を行っており、横断的な学びを通じて児童が自らの主体性と思考を育む教育が実践されていた。自ら問いを立て、調べ、考察し、他者と協働して学びを深める手順が重視されており、単なる知識の習得にとどまらない深い学びが見られた。

香北中学校では、MYP の理念に基づき、IB の教育理念や 10 の学習者像を教育目標の中に取り入れ、教育内容や教育方法の改善を続けており、授業では、協働する力や批判的思考力、違いを認める力や共鳴する心などを高めていくため、生徒中心で学びが展開されていく姿が見られた。

「人間を大切にする～自分らしく 自分で動き探究する～」を小・中共通で 9 年間の学校教育目標として設定しており、小・中共に、児童生徒がのびのびと、主体的に考え、話し合い、発表する姿が見られた。



▲ 大宮小学校での研修の様子



▲ 香北中学校での研修の様子

教育民生常任委員会 行政視察研修所感

委員名

湯口 新

1 研修日程

令和 7年 5月 29日 (木)

2 研修先

高知県香美市立大宮小学校および市立香北中学校

3 研修目的

国際バカロレア教育の取り組みについて

4 研修所感

私自身は香美市の国際バカロレア教育の取り組みを視察するのは「成果発表会」に参加して以来二度目となるが、その「成果発表会」が素晴らしいものであったために、教育民生常任委員会全員で視察できたことは、委員会として国際バカロレア教育を理解し、導入までの議論やその後の展開についての話し合いを行う上で非常に意義のある視察であったと感じている。

小学校、中学校ともに校長先生からの説明と生徒の授業風景、また担当職員さんからの説明を受け、導入が進む香美市でもまだ解決できていない課題や、反対に導入したからこそその成果を実感できている教職員さんの反応を目の当たりにし、三豊市にとっても導入時にはそれなりの困難が伴うが、導入後はその困難も良い経験談にできるくらいの成果が伴う施策となりうる可能性を感じた。

以下、当日のやりとりで印象に残ったものの抜粋。

【大宮小学校】

- ・森田校長：IBの匂いがする学校を目指している。
- ・IB全てを教科に盛り込むのは難しい。毎年改善しながら。
- ・通常では「総合的な学習をする時間」で1つのテーマで25時間程度学習する。時間が足りないので教科の中にも落とし込んで時間数をクリアしている。上学年のテーマを落としてきて学ぶこともある。教科の学習ではなくテーマを探究する中で学習する。
- ・IB導入で移住が5名。IBの良い影響。学校の良い点を説明するのにIBはメリット。
- ・認定校になって5年目。メリットをじわじわ感じる。
- ・人材不足のためIBコーディネーターをしながら担任をしているのでコーディネーター業務は難しい。
- ・放課後にIBのミーティングやワークショップをとっている。その分自分の業務は圧迫される。しかし毎年新任、異動の先生がいるため大切な時間となっている。
- ・なぜ取り組み始めたか→学習指導要領の改訂でテーマが探究となった。探究的な学

びはそれぞれイメージが違った。オーストラリアの姉妹校が IB 校で、そこで様子を見た時に日本と全く違った。子供達が学びを進めるスタイルであった。それを目指すことが探究だと感じた。市教委の中では IB でなくても良いのでは、という考えもあった。議会の方でも説明したが難しく、学校で子どもたちの様子を見てもらった。

- 資料をしっかりと使えるように、図書司書の役割も大きい。ミーティングにも入る。タブレットも使うが一番は書籍。多様な学びができるように。選択ができるように。
- あえて抽象的な言葉を使って考えさせる。
- 10の学習者像を常に意識させる。
- 1年生であってもルーブリック評価（評価の具体点）を示す。
- エキシビジョン：1年を通した6年の最大のイベント。テーマを決めるには自分に問い続けることが大切。→サポートは先生方と共に地域の方も。発表は15分くらいでアウトプット。
- 6年生の姿を新しくくる先生には見てもらう。
- エキシビジョンでは地域の人も下級生もいろんな人を見る。下級生もイメージできる。
- タブレット導入で授業が変わってきている。多様な学びになっている。国の方向性とIBの方向性はほぼ同じになってきている。ただIB全てを実行することは難しい。／IBは国の示す方向性を具現化している。
- ユニットの中では「国語」というイメージはない。結果的に国語の学び。IBとは別に国語の授業がある。全ての授業を探究的に進めたいと思っている。教員の差をバランスをとるのは課題。
- 導入前後の評価→子供達はユニットの授業が好き。やろうとしたことができる、という回答。エキシビジョンは自分で進めないと進まない。厳しい部分。周りがサポートしても自分が動かないと動かない。そういう面で育っていく。変化、成長につながる。保護者もその姿を見てIBの良さを改めて感じる。
- 導入時には保護者には「あえて」の意味をわかってもらえなかった。うちの子には向かない、先生の多忙化を招く、などの反対意見も多かった。一部の保護者は親が知らないのもおかしい、と保護者アンバサダーとして行動したり広報をしてくれたりもした。学校ではワークショップなどで伝えていた。そのうちにIBが当たり前、売りである、と変わってきた。小、中学で公立でできることは強み。
- 教員は教員不足、2年くらいで変わる。最低でも5年間はIBを学んでいただくのがベストであるが難しい。変わってきた先生は警戒する。それを前向きに変えるのは全国初のIBに取り組むという心意気。お金もかかるが市が出してくれる。
- 不安感や負担感はミーティングや打ち合わせの時間で安心して実践してもらう。その実践の成果を教員で共有する。
- 現状と展望→香美市は10年で総括するとしている。今の5年生がある意味1年生。この子供達が中3になった時が初めて9年間のIBの成果が出る。
- 転校してきた生徒への対応は→毎年転入生はいるが馴染んでいる。今年も6年生で

入ってきているがエキシビジョンを始めている。担任がフォローはしている。

- 10年間続けてみて、とのこと。日本の教育のいいところを勉強しているのか→全ての子供達に均等に力をつける教育は良い部分。IBでも均等に力をつける部分は大切にしている。その上で両方を二刀流でやっていっている。地域の良さを学ぶところに視点を置いている。グローバルというと地域を捨てるイメージにもなるが地域の良さを感ぜられるものになっている。→10年後の対応は→個人の学力、学び方を学ぶもの。その力とモチベーションがどれくらい伸びているのか。また卒業生がどう活躍しているのか、も判断基準にはしたい。現時点では子供の力、地域の力が高まっている。
- 学習達成目標があると思うがIBによって目標が達成しにくくなるようなことは→マネジメントが重要。標準時数はクリアするが地域学習は時間がかかるので調整が必要。毎年改善しながら。→発達障害の子供達への対応は→IBは全国では選抜を受けて入る学校が多いが、公立ではいろんな子供達がいる中でその子たちのIBとはということを考えてみんなが取り組めるようにインクルーシブに進めている。
- 保護者の理解を得るための時間はどれくらいかかったか→2~3年かかった。
- 学校が変わった先生のその後は→学校単位では組織で取り組まないと難しい。学ばせ方を学べるのは強み。

【中学校】

- 小中で共通の目標。10の学習者像
- 個人が理解したことを伝える→概念理解が必要。探究・行動・振り返り。
- 「授業の質」が教師の共通言語になっているのが何よりの強み。
- 根拠のある文章を書く力がついている。
- 先生の業務量の変化は。IBに出会ってから概念理解や探究テーマに向かって子供達の見方をテストのためではなく社会に出てからのために教えられるようになった。業務負担は未体験のものなので。経験があるのでそのブラッシュアップの変化になる。
- グループでの授業が多い。教科によってIBのやりやすさはあるのか→基本的にはこれまでの学習指導要領での授業と大差はない。ただ学習指導要領だけに縛られなくなった。対話を重視したスタイルに変わっている。教科によってやりにくさはないがその日その日でやり方は変わる。技術家庭科はIBが求めるものとの差がある。IBの8段階と文科省の5段階の間で折り合いをつけながらやっているがIBの4つの観点は難しい。
- 校風が自由な感じがする。IBとの関連は→各先生も各生徒の到達状況は違うというのを理解しながら。そのために生徒に質問して考えさせたりしている。授業者が生徒をつなぐ、ファシリテートをしている。→担当先生はその場で判断しているのか→先生も生徒と対話しながら確認している。自由に見える部分は学習規律を気にする人もいる。IBの考え方は思考できたら良いじゃない、という考え方。思考が止

まっていないかどうか。最初は怖い。教えるほうが楽。ただやってみるとそのほうが楽しい。／以前は型ハメの授業。それでもできる子はできる。できない子はできない。

- ・高校受験などで保護者理解、保護者の意識をどう変えたのか。→7割は肯定化。良い驚きを持っている。中には否定派もいる。導入前の令和4年度の回答では7割が否定派、不安を持っていた。結果的に進学できており好転してきている。／地域の協力体制は必須なのか。→地域との協働はIBで求められている。欠かせない。どう巻き込むか、は難しさもあると思う。／幼少期より変わらない仲間、少人数だから取り組めるのではないか。→少人数はやりやすい。授業の評価を基準に当てはめながらやるので物理的にも時間がかかる。授業は成立するが先生の疲弊感はかなり出ると思う。
- ・自由な雰囲気先生が寄り添っているように感じた。繋がりや絆が気づけているように感じた。不登校やいじめの問題もあるが、この学校ではどうか。→不登校の割合は高い。10～12%が不登校気味。いじめに関しては重大事態にはなっていないがあることはある。SNSなどでも。他校と比べたら少ない。
- ・アウトプットが積極的になっているように感じる。古文や漢文ではどうか→IBでも取り組んでいる。詰め込み式とそれを通して考える部分をIBのやり方で。／これからは→中学校での学び方が土台になっているという声が届いた。その時は先々につながっているように感じた。
- ・主権者教育は→銘打ってはやっていない。学校生活を通してやっている。→IBとは相性がいいように感じるが。→社会科の内容で言うと公民分野で選挙や政治でマニフェストを見てのディスカッションをしたり、経済の内容で税金のこと、予算配分のことなどを議論したことはある。どういう視点を持って考えるかにはIBも関わる。
- ・年配の先生が転入してきた場合の対応は→ベテランになればなるほど難しい。キャリアが邪魔をする場合もある。
- ・市が導入したもの。いつまで続くか。→IB教育は良いと感じている。モデル校であり続けたい。
- ・悪いイメージの保護者に対する対応は→アンケートでは学力が低い子からの意見が多かったと思っている。それについてはそこを伸ばすよう努める。

教育民生常任委員会 行政視察研修所感

委員名

瀧本 哲史

令和7年5月29日(木) 9:30~11:45

研修先

大宮小学校

研修目的

バカロレア教育

【所感】

背景

公立学校におけるIB教育（国際バカロレア教育）およびIB校認定に関する取り組み、カリキュラム改善、教員の負担軽減、保護者・地域連携など、複数の教育改革の現状や課題、今後の展開について詳細に議論された内容をまとめた。

1. 森田校長が学校の取り組みについて紹介。学校の雰囲気や掲示物、子供たちの様子などから、IBの雰囲気を目指す学校運営と、IBに関する理解が難しい点について言及している。

2. 公立学校としての学習指導要領とIB教育（IBフレームワーク）の両立の難しさについて。

文部科学省の学習指導要領に基づいた授業運営の中で、IBが求める6つのテーマを全教科に盛り込むことが難しい点が指摘された。

算数など一部の教科がテーマに馴染みにくい。

毎年プログラムを改善しながら取り組んでいる。

3. プログラムの構成と実施体制について。

初等教育プログラムの中で、1年生から6年生まで各学年ごとに色分けされた6つのテーマが設定され、6年生は卒業時にエキシビジョンで探究の成果を発表する。

各テーマに対して25時間程度のユニット授業を設け、年150時間以上の学習時間を確保している。

国語、理科、社会、道徳など複数の教科を統合して学習するカリキュラムとなっている。

4. 児童数と移住の影響について。

現在の児童数は157名で、今年の1年生は41名の2クラスとなっている。

将来的に児童数が100名を切る可能性があり、学びの面での影響が懸念される。

IB教育に魅力を感じた家庭が県内外から移住してきており、今年は東京から移住した児童がいる。

5. 教員のリソースとIBコーディネーターの不足について。

本来、IBコーディネーターは専任でサポートや研修準備を行うが、今年は2年生の担任である岡本先生が兼任しており、負担が大きい状況である。

担当教員が余力を持たず、働き方改革の中での課題となっている。

6. 教員の IB 研修機会の確保と勤務時間内での実施について。

IB 関係者からは、放課後の時間帯に研修やワークショップを実施することに懸念が示され、勤務時間内での IB 研修体制の確立が求められている。

金曜日は IB の理論吸収や実践の交換のためのワークショップが行われているが、放課後の時間帯の使用については改善の余地がある。

7. IB 教育の取り組み開始の背景について。

2020 年の学習指導要領改定により探究学習の重要性が提示されたことが契機となった。

オーストラリアの姉妹校の視察により、IB 教育の実践例を目の当たりにし、教育長の決断があった。

議会での予算確保や学校訪問など、外部への説明活動も行われた。

8. 具体的な授業実践と評価方法（例：2 年生の「where we are in place and time」テーマ）の説明について。

2 年生のテーマでは、抽象的な表現を用いて街の時間的・場所的空間について探究した。

ループリックにより、評価基準が A 評価（オリジナルな工夫と詳細な説明）と B 評価（場所の良さを描写・説明）で明示され、子どもたちは自分の成果をポスターで表現し、地域の人々に紹介する。

図書館の書籍やタブレット、地域の人々など、多様な情報源を活用して学習を進める仕組みが整えられている。

9. 子供達が発表までの道のりの重要性

10. エキシビジョンでの食べ物をテーマにした探究プロジェクトの発表内容について

発表者は自らの探究が、当初は食べ物をテーマとしていたが、冬休み中に自己反省を重ねた結果、テーマに変化が生じたことを説明している。

11. 卵のお母さんとのインタビューと家庭内の食文化について

発表者は、自身の家庭では毎年自作のお米を作る文化があり、化学肥料を使っていない方法を採用しているため、関係者にインタビューを行った。

インタビューを通して、伝統的な食文化の継承と、自身の探究テーマとしての『メッセージを込めた自己表現』、さらにそれが他者へのロールモデルとしての影響を与える可能性についても触れている。

12. 探究テーマ変更に関する内面的葛藤について

発表者は、食に対する興味を持ちながらも、途中で『このテーマを変えたいとか変えるべきじゃないか』という葛藤に陥ったこと、そしてその悩みや内面的な葛藤を発表の中に盛り込んで伝えたことを述べている。

13. 導入経緯と教育改革の背景について

2020 年の学習指導要領の改訂により、短期的な学びをどう構成するかが求められ、タブレットなどの IT 機器を活用した授業改革が進められた。

伝統的な一方通行の授業ではなく、子どもたち自身が問いを立て、課題を追求す

る探究的学びが重視され、その点は国の教育方針と一致している。

14. 授業内容とユニットプログラムの実施について

授業はユニットプログラムに基づいており、算数や国語など、教科ごとの授業とテーマを追求する探究授業とが統合されている。

6年生は、これまで教師から与えられたセンターアイデアではなく、自分たちで考え出すプロセスを経て、自らテーマを決定して発表する。

発表は約15分程度で、1年間かけて準備される。英語で発表する計画もあり、地域の英語が得意な方との連携も模索されている。

15. 導入前後の児童生徒と保護者の変化について

保護者へのアンケート調査では、子どもたちは自身がやりたいことを実現できる点に魅力を感じ、授業を非常に好きになっているとの結果が出た。

初期は、IB教育に対して‘時間がかかる’や‘先生たちの多忙化’に対する懸念があり、保護者側から反対意見もあったが、保護者アンバサダーの活動やPTA広報を通じて理解が進んでいる。

中学校に向けて、9年間での実施が強みとなっており、保護者や地域の意識も徐々に前向きに変化している。

16. 導入前後の教員の意識と課題（教員不足・定着率の問題）について

教員は不足しており、特に若手教員が短期間で離職するケースが多く、最低でも5年間の勤務とIB教育の実践が望ましいが現状は難しい。

新たなIB教育担当者の採用は公募制で行われるが、公立学校でのIB教育の実践に対して理解が十分でないため、採用が進みにくい。

多忙さや初めて取り組む不安を解消するために、定期的なミーティングやワークショップを通じた教員間の交流・研修が計画されている。

17. 現状と今後の展望について

香美市ではIB教育を10年間継続し、10年後に総括を行う計画がある。

現在の本校では、初めて6つのプログラムを実施し、5年生の生徒が中学3年に卒業する時に、IB教育で育った子どもたちの姿が見られることが期待されている。

県外からの問い合わせや移住希望などもあり、外部からの評価・関心も高まっている。

18. エキシビションの形式についての質問（個人展示かグループ展示か）。

現在エキシビションは個人で実施しており、生徒各自が自身の学習者像やスキルに基づいて展示を行う。

テーマが似通った生徒がいる場合もあるが、やりたいことが異なっているため重複しても問題ない。

6年生に進む段階で、グループでの発表や科学年での経験を取り入れる計画もある。

19. 転校生の適応と馴染みやすさに関する質問。

毎年転入生がいるが、概ね皆自然に馴染んでいる。

今期は6年生として東京から転入してくる生徒がいるため、担任による既存学習

のフォローがしっかり行われている。

20. 日本の教育の伝統や地域文化の活用に関する質問。

戦後からの日本の教育の良さ、寺子屋教育の精神や地域文化が評価されている。プログラム内には地域の良さや伝統、香北町をはじめとする地域の文化を学ぶ機会が豊富に設けられている。

地域のゲストティーチャーを招き、グローバルな視点と地域密着型の教育の両立を図っている。

21. 10年間のプログラム効果や将来の評価に関する質問。

子供たちの学力（認知能力）と非認知能力の両面で育成された力が確認されている。

卒業生の社会貢献や実際の活躍も合わせた総合評価を行っている。

地域と連携しながら、教育成果と生涯学習の促進に取り組んでいる。

22. IT教育を含むプログラムにおける学習目標達成と時間管理に関する質問。

探究型の時間が多くなると学習目標達成が難しくなるため、プログラム内外で国語などの科目の時間を厳密にカウントしている。

年間6つのテーマをそれぞれの重要度に応じた時間配分で調整している。

毎年プログラムの見直しを行い、時間管理やテーマごとの深度を調整している。

23. 発達障害を持つ生徒の支援とインクルーシブ教育の実施に関する質問。

公立学校として、知的学級や上長学級など多様なニーズに対応する体制が整っている。

各生徒の得意分野や興味を踏まえた探究学習を、担任や教員とともに考えて実施している。

IB教育は、どの子どもも能力を発揮できるようなインクルーシブな仕組みを重視している。

24. IBコーディネーターの負担や保護者アンバサダー制度、及び公立学校でのIB教育普及に関する質問。

初期には一人のコーディネーター体制（一代目から二代目へと継承）が行われた。

担任とIBコーディネーターを兼務するなど、教職員の負担が懸念されるが、必要な体制は整備されている。

保護者アンバサダー制度は、保護者の理解を得るために一定期間を経て形成された。

公立学校でのIB教育普及については、全国的には広がっていないが、成功事例として今後の普及策が議論されている。

令和7年5月29日(木) 13:00~15:00

研修先

香北中学校

研修目的

バカロレア教育

【所感】

背景

本会議は香美市の教育施策、特に学園都市構想の進捗状況、国際バカロレア認定校としての取り組み、AIを活用した学習支援実証研究事業の開始、地域連携や生徒の主体性育成、基礎学力定着、授業改善などについて議論した。参加校の生徒数や教職員数、学級編成、地域との連携状況、今年度の重点課題や具体的な取り組みも共有された。香美市は「よってたかって教育でつくる探究が増える学園都市構想」に基づき、学校や教育機関、団体等が連携し、探究の街として教育を推進している。第二期教育振興基本形成により、郷土愛・探究的学び・未来創造を基本理念とし、市内全域で探究的な活動が活発化している。また、IB（国際バカロレア）教育プログラム導入後の学校現場における教員・生徒・保護者・地域社会の変化や課題、運営上の工夫について詳細に議論したものである。主に教員のやりがいや業務量の変化、評価基準の調整、授業スタイルや教室環境の変化、生徒の主体性や不登校・いじめの現状、保護者や地域との連携、今後の展望や課題などが取り上げられている。参加者は現場教員や研究主任、コーディネーターなどで、実践的なノウハウや課題解決策、地域協力体制の強化なども議論された。

1. 香美市の教育の概要と学園都市構想の進捗について

香美市は「よってたかって教育でつくる探究が増える学園都市構想」に基づき、学校・教育機関・団体が連携し、探究の街として教育を推進している。第二期教育振興基本形成により、郷土を愛し、探究的に学び、未来を創る人づくりを基本理念とし、市内各所で探究的な活動が起こる街を目指している。

2. 本校の国際バカロレア認定状況と生徒・教職員数、学級編成

大宮小学校は令和3年1月に国際バカロレア PYP 認定校、本校は令和4年12月に MYP 認定校となった。今年度の生徒数は69名（昨年度82名）、通常学級3学級、特別支援学級1学級。

3. AIを活用した学習支援実証研究事業の指定と今後の活動開始時期

高知県教育委員会より AI を活用した学習支援実証研究事業の指定を受け、指定事業の趣旨に沿って来月から本格的な活動が始まる予定である。

4. 本校生徒・地域性・保護者・地域連携の特徴

生徒は幼少期からの仲間関係が深く、保護者同士の関係も良好である。生徒は規則正しく純朴で真面目な生徒が多く、奉仕活動や生徒主体の活動が多い。女子生徒へのスラックスの同意など、ジェンダー平等に関する活動も行われている。PTAだけでなく、元保護者による応援隊という組織もあり、資源回収など地域の協力体制が非常に強い。地域には人のために役立とうとする奉仕の精神や高い教育文化が根

付いており、子どもたちをより高みへと導く魅力ある地域である。

5. 学校教育目標と小中一貫教育の推進、目標・取り組みの共通化

学校教育目標は「人間を大切にする 自分らしく自分で動き探究する」。これは国際バカロレア教育が重視する児童生徒の主体性を学びを通して発揮する姿を表現している。小中の義務教育9年間を一貫教育につなぎ、昨年度より小学校・中学校の教育目標を統一。目標や取り組みの共通化を進めており、IT教育が掲げる自由な学習者像を目指す子ども像に設定し、共通の研究手段や実践方法を二つの議会で検討しながら進めている。小中で取り組みの差異が起こらないよう、常に共通認識を持ち、学校教育目標達成のための取り組みを行っている。

6. IB教育（国際バカロレア）における学習と指導の方針

IB教育では知識伝達や暗記よりも、個人が理解したことを共同で意味構築する教育を重視。概念理解を最重要目標とし、探究行動や振り返りを日常化。思考・自己管理・社会的コミュニケーションなどのスキル発達を促進し、概念理解に迫る取り組みを行っている。学習と指導のサイクルを通じて、学校教育目標達成の最大の手立ては授業であると位置付けている。

7. 授業改善と組織体制（研究推進委員会・チーム会等）

授業の質を中心に据え、研究推進委員会（研究主任のリーダーシップ）で進捗状況や精査・改善を常に議論。IB担当コーディネーターが全チーム会に参加し、指導助言や質の均衡を図る。職員室内では概念理解の迫り方や評価の妥当性など、授業構築に関する相談が日常的に行われており、授業の質が教職員の共通言語となっていることが本校の強みである。

8. 特徴的な三つの取り組み（SA、CP、IDU）の内容と成果

SA（サービスアズアクション）は生徒が地域社会や人々の生活に貢献する奉仕活動であり、学校の枠を超えた実社会で行動できる力の育成を目指している。生徒が自ら計画し実践するものや、地域のボランティア活動への応募など、様々な形で土日や夏休みに自主的に活動している。

CP（コミュニティプロジェクト）は中学校3年間の集大成で、生徒自身の関心や興味を出発点にコミュニティに貢献するプロジェクトを立ち上げ、最後まで責任を持って取り組む総合学習。生徒たちは共同作業で目標に取り組み、奉仕活動を通じた学習を行い、プロジェクトの終わりには全員が発表を行う。

IDU（学際的単元）は複数教科の知識や考え方を統合し新たな知識を創造するプロセス。例えば保健体育科と社会科を関連させ、平等かつ公正な社会を構築する考え方やスキルを身につける授業を実施している。

これらの取り組みの成果として、生徒アンケートでは意見をまとめる力、グローバルな視点、物事を多様な視点で捉える力が向上したとされている。探究的な授業等を通じて、ものの見方や考え方、比較や根拠ある説得力のある文章を書く力が確実に向上していると捉えている。

9. 今年度の重点課題と具体的な取り組み（基礎学力定着、IB浸透、挨拶・コミュニケーション）

基礎学力定着：昨年度末の高知県学力定着状況調査で現2年生の知識機能が厳しい結果となり、今年度から授業時間を45分に設定し、生み出される約30分をモジュールとして基礎学力定着の時間に充てる。プロジェクトチームを組織し、3人の先生が計画を担当し、効果的な運営を目指している。

IB浸透：昨年度の学校評価アンケートでIB学習者像を意識した生活の肯定的回答は49%。IB校としての意識向上のため、集会での話や学級目標立ての際に意識させる取り組みを行っている。

挨拶・コミュニケーション：地域性として田舎気質でおとなしい傾向があり、どの年代・場面でも自らコミュニケーションを取る意識向上が必要とされ、全学年・全場面での調整に努めている。

10. 令和5年度ボランティアスピリットアワードの受賞作品紹介

令和5年度のボランティアスピリットアワードを受賞した生徒の作品が一覧できる二次元コードを紹介。

11. IBプログラム導入前後で教員のやりがいやモチベーション、業務量にどのような変化があったか？

導入前は数学を通して何を学ばせたいか明確でなかったが、IBプログラム導入後は、概念理解や探究テーマを通じて、社会に出た時に役立つ考え方を学ばせる授業ができるようになり、やりがいと喜びを感じている。一方で、業務的な負担や新しい実践への挑戦は大変だった。経験の積み重ねにより不安は減少し、過去の実践を活かしつつ新しい挑戦も続けている。

12. IBプログラム導入後、教員の負担はどれくらい変化したか？

導入から3年経過し、経験の蓄積により大きな変化は減少。過去の実践を踏襲できるため不安は減ったが、新しいことに挑戦する際は引き続き発想力が求められる。

13. IBプログラムの実践内容やノウハウを他の教員とどのように共有しているか？

年度初めの研修職員会でIBプログラムの内容や授業進行、準備方法を共有。週1回または2週に1回、他教科の教員を含むチーム会で進捗や評価方法を共有。毎週水曜日の研修職員会でも提案や理解促進を行っている。

14. IBプログラムは教科ごとにやりやすさ・やりにくさがあるか？

松本：基本的には従来の学習指導要領と大差なく、教科による大きなやりやすさ・やりにくさはない。生徒同士の会話を重視するスタイルに全体が変化している。グループ活動中心の日や一斉指導の日があり、教科や内容によって使い分けている。

15. IBプログラムの評価基準と学習指導要領の評価基準の違いと、その調整の難しさについて

松本：IBの8段階評価と文科省の5段階評価（知識・技能・思考・判断・表現）に差があり、特に技術家庭科では調整が難しい。IBの4つの観点のうち1つは学習指導要領の評価基準にうまく当てはまらない部分がある。

16. 教室環境や授業スタイルの変化について（自由な雰囲気、壁面の黒板や映像利用など）

参加者：教室の壁面黒板や映像を活用し、自由な雰囲気です授業が行われている。生徒の主体的な活動や発表が重視されている。

17. IB 教育導入による学習スタイルの変化と自由度の関連性について

IB 教育導入により、従来の『決められた答えを埋める』学習から、生徒が自由に考え追求する学習スタイルへと変化している。先生は生徒一人一人の到達状況を見ながら、必要な部分を声かけや質問で補い、個別にアプローチを変えている。生徒の進捗状況も見ながら調整している。

18. 授業担当教師は生徒の不足部分を瞬時に判断しているのか

授業中に生徒が分かっているかどうかは、実際に声かけや質問を通じて把握している。途中で声をかけたり、認識を確認しながら状況を把握している。

19. 自由な学習スタイルと学習規律のバランスについて

見学者からは自由に見える部分が多いが、IB の思考ができていれば問題ないと考えている。座ってタブレットを使っている生徒も、思考が止まっていなければ良いという考え方で運営している。

20. 教師主導型授業と生徒主体型授業の違い、及びその効果について

教師主導型の方が楽で達成感もあるが、生徒主体型に切り替えることで生徒の学びの責任感が高まり、成績や学力も向上してきた。最初は段階的に自由度を増やし、生徒の様子を見ながら調整している。

21. 保護者の理解や意識変化、高校受験への不安、地域協力体制について

現在、保護者の約 7 割が IB 教育に賛成している。導入前（令和三年度、令和四年度）は 7 割が否定的・不安だったが、子供の変化や思考力の育成を実感し、好転してきている。地域協力体制は必須であり、ID アンバサダーという組織が地域を巻き込んで教育推進やワークショップを実施している。

22. 生徒数（少人数・多人数）と IB 教育の関係、運営上の課題について

少人数（例：69 名、1 年 25 名、2 年 27 名、3 年 27 名）はやりやすいが、多人数（例：1 学年 80 名、3 学年 240 名）でも授業自体は成立する。ただし、評価作業や一人一人の基準確認に物理的な時間がかかり、先生の疲弊感が大きくなる。

23. 不登校やいじめの現状について

（回答は未記載だが、質問として明確に挙げられている）

24. 大宮地域の学校における不登校の割合やその傾向について

大宮地域では不登校気味の生徒の割合が 10%から 12%と非常に高い。不登校の割合は IB 導入前後で大きな変化はなく、IB 導入が直接の原因ではない。過去 5 年間で IB が原因で不登校になった生徒はいない。

25. いじめの状況について

重大事態になるようないじめは発生していないが、SNS での暴言や傷つく事例はある。他地域と比べて生徒指導上の問題は非常に少ない。

26. IB 導入前後での不登校の変化について

数値的には記録しているが、IB 導入前後で不登校の割合に大きな変化はない。IB 導入が不登校の直接的な要因ではない。

27. IB 教育における日本文化や古文・漢文の扱いについて

IB でも学習指導要領に基づき古文の学習を取り入れている。古文の理解を通して現代との比較や日本文化の理解を深めるゴールが設定されている。小学校でも季節や日本文化に関する表現を取り入れている。

28. IB 教育の長期的な成果や 20 年後の展望について

20 年後には子どもたちが大人になり、学習経験が社会で活かされていることを期待している。高校進学後も中学校での学びが土台となり、実践できているという声がある。中学校での学びが高校やその後の人生に繋がっていることを嬉しく思っている。

29. 主権者教育の現状と IB 教育との親和性について

中学校で主権者教育を特別に実施しているわけではないが、教科学習や学校生活を通じて実施している。社会科では選挙や政治、経済分野で模擬選挙や予算配分の議論などを行っている。IB 教育の探究学習は主権者教育と相性が良いと考えられる。IB 教育では学習の視点やスキルを重視し、より深い議論や考察ができるようにしている。

30. IB 導入の合意経緯について

平成 31 年 3 月に香美市教育委員会から IB 導入の打診があった。国際高校の立ち上げやワークショップへの参加、オーストラリアの IB 校視察を経て、探究型学習の有用性を認識した。家屋町は地域性が安定しており、小学校の総合学習システムが確立していたため、IB 導入の対象となった。中学校も合わせて導入することとなった。

31. 事業内容についての再確認と概要説明

全教員が主体となり、授業を進めている。

32. 先生の意識の変化や研修内容について、特に新しく転入してきた先生や年配の先生の適応について

ベテランの先生ほど新しいシステムへの適応が難しい傾向がある。自分のキャリアや従来のやり方に自信を持っているため、新しい方法に抵抗感がある場合が多い。タブレット導入などデジタル化にも戸惑いがあるが、授業を一緒に作る中で部分的に新しいやり方を取り入れる先生もいる。強制はできないが、実際にタブレットを使ってみると良さを感じる先生もいた。

33. 導入時の先生方の不安感や負担感をどのように解決したか

研修やチーム会を通じてプログラムの理解を深め、不安感や負担感の解消を図った。今までの授業をやめる必要はなく、学び方や学ぶ内容に新たな要素を加えるという認識を持ってもらうことが重要。教材研究や授業実践を繰り返し、互いにフィードバックし合うことで不安感が和らいでいく。コーディネーターの先生が相談に乗るなど、個々の先生の認識的な部分を緩和する取り組みも行った。

34. 先生方が達成感を感じるまでの期間やきっかけ

生徒が授業中に楽しそうな様子を見た瞬間に先生の意識が変わることが多い。発表会など特別な機会でなくても、日々の授業で生徒が探究学習を始めたと感じたと

きに達成感を得られる。テストの点数など数値よりも、授業が楽しいという積み重ねが達成感につながる。子供たちが授業中に寝なくなるなど、行動の変化も見られる。

35. 現状における課題や今後の展望

教員面での課題がある。近隣の教員の確保や配置などが課題となっている。

36. IB 教育導入後の教職員の協働や課題について

ベテランの先生や新しく入った先生を巻き込みながら、教職員が足並みを揃えて取り組むことが課題である。

37. 生徒の主体的な活動や社会参画力の育成について

生徒が学校生活を振り返り、必要な活動やおかしい点に気づき、行動に移せる力をつけることが課題。単に自由に活動するのではなく、校則や社会のルールを見て判断し、行動できる力が実社会で必要とされる。

38. 地域社会との連携やサービスアンドアクション (SA) 活動の現状と課題

現状は校内活動が多く、地域社会との結びつきが少ない。衛生活動の実施数も少ない。今後は地域社会に目を向け、子どもの学習活動と地域とのつながりを強化する必要がある。

39. 校長の今後の展望について

市が導入した IB 教育がいつまで続くかは不透明だが、教育システムとして非常に良いと感じている。昨年度の新入生保護者には、費用を払ってでもこのシステムを受けると価値があると伝えた。今後もモデル校であり続けたい。少人数だからできることもあるが、人数が多くても連携や学び合いができる部分もある。

40. 議会や市長の交代による教育施策への影響、議会の反応について

議会側は市長の意向により勉強・導入を進めているが、議員の訪問はほぼ無く、教育への関心や技術が高いとは感じない。地域の議員は賛成だと感じる。

41. IB 教育に対する保護者の不満やケアについて

令和 6 年度のアンケートでは、学研費が厳しい保護者からの不満が多かった。情報の高い層ばかりを高めて、本当に困っている層を具体的に支援できていないという意見が多かった。基礎学力が厳しい生徒を救い上げるため、45 分授業にして定着の時間を確保するなどの対応を行った。保護者との面談も実施している。

42. 小学校と中学校における発表形態や学習者像の掲示の違いについて

小学校の TYP は 6 年生の最後に個人発表、中学校 (MYP) は 3 年間で 1~3 名のグループ発表となっているため、中学はグループ発表が多い。小学校では学習者像の意識が少なかったため、目につく場所に掲示し、担任が話題にする取り組みを進めている。

教育民生常任委員会 行政視察研修所感

委員名

金子 辰男

1 研修日程

令和7年5月29日 木曜日

2 研修先

高知県香美市立大宮小学校及び香北中学校

3 研修目的

国際バカロレア教育導入について

4 研修所感

大宮小学校説明員：森田卓志校長

市教育振興課 学校教育班 教育企画監 田村香江

森田校長の名刺に国際バカロレアPYP認定校とあり、IB教育の使命として、IBは多様な文化の理解と尊重の精神を通じて、より良い、より平和な世界を築くことに貢献する、探究心、知識、思いやりに富んだ若者の育成を目的としています。と記している。丁度、小学2年生のグループに分かれての発表会があり、子どもたちは愛をテーマにそれぞれ探究をする、大変活発で独伊の意見を見事に発表、また質問にも受け答えをしていた。この子達が2年生。元気に発表する、受け答えする、バカロレア教育の効果、成果が大いに垣間見えた。まずは驚いた。教師たちも自信に溢れ、快活さが見てとれた。我が国は古来より海外から新しい知識や物が伝わってきた時は、それを自分達の物にする知恵や工夫が優れていたと歴史にあった。今、武士道などを現代風にサムライジャパン、映画の中でもその心意気を表現する題材が増えている。また高い評価を受けている。目的は子供達が逞しく現代から未来へ生き抜く力を身につけることだと思う。どうか日本風に、素晴らしい教育に発展することを願うばかりである。

香北中学校説明員：坂下佳総校長 他3名

坂下校長の名刺に国際バカロレアMYP認定校とある。全校生徒数は69名、小規模ながら各教室の前を通過するときには、はっきりとした声で挨拶していた。やはり大変活発な生徒ばかりであった。ただ、気になったのは不登校の生徒が1割ほどいますとのこと。質問に日本古来の教育を研究されたか伺った。その時の若い職員の熱い説明、熱心さを充分に感じた。この教育が将来、地域のために、日本のためになるようにと願うばかりである。

教育民生常任委員会 行政視察研修所感

委員名	浜口 恭行
-----	-------

●香美市立大宮小学校

「国際バカロレア教育導入について」

①導入の経緯について

2020年国の学習指導要領が変わって、「探究」的な学びをどうするかからスタート。香美市も模索していたが、オーストラリアでIB教育を視察し、日本とは違う学習に取り組んでいたところから、子ども達が自ら学ぶスタイルに感銘を受け、当時の教育長が推進した。

②文部科学省が普及促進している国際バカロレア教育とこれまでの日本の教育との違いは

タブレットが入って授業が変わった。問いをたてて課題解決をやるスタイルが違う。時間数に制限もあり、全ての教科をIBで実行することは難しいが、具現化ができています。

③授業内容について

ユニットのプログラムに合わせている。

数学は入っていないが、教科書中心の授業と探究的な授業どちらも、問いを出して自分達で解決していくスタイルをとり、バランスをとってやっていく事が課題である。

④導入前後の児童・生徒の変化（意識や成長等）について

子ども達はユニットの勉強は好きである。エキシビジョン（児童がこれまでの探究型学習で培った様々な力を、卒業研究として表現する発表会）で6年生は育ちつつある。

エキシビジョンで感動し、IBのよさ、保護者も成長を実感している。

⑤導入前後の保護者の変化について（意識、考え方、捉え方等）

保護者の反対もあった。学校評価アンケートでは、うちの子は向かない、先生が多忙など→親がIB教育を知らないのにどうするか、から保護者アンバサダーがスターとした。9年間IB教育に取り組む強みもあり、PTAが協力もして広めていただいた。

⑥導入前後の先生方の意識の変化や研修内容について

教員不足・産休もある中、最低5年間は取り組んでいただきたい。

研修費用は市が負担するし、メリットを感じてもらおうようサポートしている。

もっとやりたいと思ってもらうよう職員養成している。

⑦導入にあたり、先生方の不安感や負担感をどのようにして解決したのか

ミーティング、打ち合わせをこまめに行い、話し合いして実践してもらう。

⑧現状における課題や今後の展望について

香美市のIB教育は、まずは10年間続けて総括したい。

今の5年生が1年生の時にスタートし、中学3年生で初めて出て行く。

子ども達の姿、地域、IB教育に協力してくれていて、県外からの問い合わせもあり、IB教育を学びたいために移住してきている家族もある。

◎所感

以上、大宮小学校で公立学校によるIB教育導入について学んだが、エキシビジョンも録画を拝見させていただいたが、児童がこれまでの探究型学習で培った様々な力を、卒業研究として表現する発表会を通して、成果が出ているところを実感でき、6年生は育ちつつある。IBのよさ、保護者も成長を実感しつつ、IB教育が浸透している点を学べ、とても参考になった。

●香美市立香北中学校

「国際バカロレア教育導入について」

香美市の教育委員会から打診があり、高知国際高校が立ち上げて、香美市の当時の教育長が推進した。ワークショップもして、探究の町、教育振興からの導入となった。

数学を通してどんな事を学んで欲しいか、テストの点とか学力の部分で成果があるということ、子供主体の授業を進めていた。

研修によるプログラムの理解を深め、授業のやり方などはチーム会議で話し合いをもっていた。

現状における課題や今後の展望については、やはり公立校なので人事異動が伴う。ベテランが辞めたり新しい先生への指導など。IB教育をを足並みそろえてやれるかが課題である。

生徒は授業の中で、学習面以外でも日常生活の中でいろいろな気づきをして、変えていける「力」、今の社会の中で自分自身で判断し、行動できる「力」をつけていけるかが課題である。

ただ地域とのかかわり、SA（奉仕活動）は校内にとどまっている。社会との結びつき。

地域社会の中で課題解決できるか、子どもの学習活動の中で考えて活動して欲しい、普通の公立学校のモデル校として続けていきたい。

◎所感

以上、香北中学校でも公立学校によるIB教育導入について学んだが、中学生では先生方職員、特に若い教職員の力があって、IB教育が成り立っているような気がした。

全校生徒が60名前後だからこそ取り組めると言うメリットもあり、全校生徒275名の詫間中学校で取り組んでいけるのか、現状の成績の上に、IBの評価を出していけるのかが少し不安なところもあるだろうが、中学校でもIB教育が浸透している点を学べ、とても参考になった。

教育民生常任委員会 行政視察研修所感

委員名

水本 真奈美

「国際バカロレア教育の取り組みについて」

日時：令和7年5月29日(木) 9:30～11:50

場所：香美市立大宮小学校(香美市香北町)

1、高知県香美市について

高知県の北東部に位置し、人口24,709人、面積537.86km²

平成18年3町が合併し、香美市となる。3町の中で、香北町は1小学校・1中学校のみで香北町全体でIBに取り組む。

2、香美市の大宮小学校が、公立初のIB認定校に

2021年1月、香美市立大宮小学校は、国際バカロレア教育機構の初等教育プログラムの認定を取得。国内の公立小学校の中では、国内初の認定であり、中山間地域の学校に導入したモデルケースとして注目され、視察も多い状況である。

IBは「多様な文化の理解と尊重の精神を通じて、よりよい、より平和な世界を築くことに貢献する、探究心、知識、思いやりに富んだ若者を育成すること」を目標とした世界共通の教育プログラムである。

当初、IBはインターナショナルスクールを中心に展開されてきたが、近年、広がり伸展し、2021年6月30日現在159以上の国と地域で約5500校が認定校となっており、日本では96校、そのうち一条校は53校になる。政府は、国際競争力を高めるため、認定校を2022年度までに200校以上とする目標を掲げる中、公立小学校で国内初のPYP認定校となった。

3、導入のきっかけ、経緯について

香美市は幼少中高大と教育機関に恵まれており、この環境を最大限に生かし、市全体で、探究的なまちづくりをしていきたいと考えていたところ、市が目指す主体的かつ協働的な人間像とIBが目指す10の学習者像と重なる部分が多く、その上、探究を中心としたIBプログラムを活用し、より発展的な教育が目指せると同時にモデル校を作りことでIBの効果を市内全体に波及できると考えた経緯がある。実際にオーストラリアにある香美市の姉妹校がIB校で視察に行き、タブレットを使用して子供中心の探究の学びを進めている様子を目の当たりにし、IB教育を目指す最終的にその当時の教育長が決断したとのことである。もともと、同県では先行して、高知県立高知国際中学校・高等学校が、IB認

定校となっていたことから、IBへの理解を深めやすかったことも後押しとなった。

大宮小学校が選ばれた理由として、もともと香北地域はコミュニティスクールや地域学校協働本部が設置されていて、大宮小学校は地域に根差した総合的な学習時間が充実していた。その総合学習で学んだテーマについて高知工科大学の留学生に英語でプレゼンテーションに行くなど、英語教育にも重点を置いていた流れがある。IBはまず自分たちの地域に目を向け、考え、そこからさらにグローバルな視点で考え行動するといった発展的な教育なので、大宮小学校において導入に至った。

4、実際、どのようにIBの探究学習が展開されているのか

大宮小学校では、各学年が、一年間で6つの教科横断的な探究テーマについて学ぶ。(6つのテーマを探究=6年間で36のテーマ)

学年ごとに6つのユニットプログラムは、どのプログラムもセントラルアイデアが示され、疑問や問題点を提示し、自分たちで調査、研究するスタイルで教科の枠を超えた探求のプログラムとなっている。

《IB 6つの探求テーマ》

- ・私たちは誰なのか
- ・私たちはどのような場所と時代にいるのか
- ・私たちはどのように自分を表現するのか
- ・世界はどのような仕組みになっているのか
- ・私たちは自分たちをどう組織しているのか
- ・この地域を共有すること

この学習の中で、IBが目指す10の学習者像を育み、熟成させていく。10の学習者像とは、・探究する人・知識のある人・考える人・信念を持つ人・思いやりのある人・挑戦する人・バランスの取れた人・心を開く人・コミュニケーションができる人・振り返りができる人である。

教員の学びの体制も重要で、週に1度、16時からワークショップを行いIBの考え方を学び、子どもたちの学習を共有など研修している。また、ユニット学習を仕切るIBコーディネーターを任命し、毎週一コマを使って担任とIBコーディネーターが振り返りや評価の突合せをする時間も設けている。

5、「エキシビジョン」ユニット…教職員・保護者・地域で児童を支える

特に6年生が2月に行う「エキシビジョン」は、一年間かけて一つのテーマを探究した集大成を一人一人が発表する場で、保護者や地域の人も招いて開催している。

個々の興味ある、探究学習したい事例(テーマ)を7つの概念(特徴・機能・原因・変化・関連・視点・責任)で考え、個々の疑問点の調査観察や体験、仲間や地域での聞き取り、アンケートなどを行い、理解を深化させ、共有、分析、探究し、成果を発表(プレゼン)するものである。

教職員はメンターとして一年間特定の児童をサポートする。そのメンターはクラス担任、授業を持つ教員、管理職、事務員、図書支援員、ALT、養護教諭、栄養教諭も配置した。そのためにメンターのためのエキシビジョンユニットの研修を行っている。保護者、地域の方向けのIB教育についてワークショップも体験していただいている。児童数139名の小規模校であるが、保護者、地域の方々にIBの理解、子どもの学びのサポート協力を得ている。

2023年度までは「一人一人が地球人としての役割を持っている」というセントラルアイデアで取り組んでいたが、2024年度から児童の興味関心のあるものについて探究し、それを表現する内容に変更した。

実際にエキシビジョン動画を視聴させていただいたが、生徒のひたむきな探究心や調査活動、一年間の探究の苦労や成長過程がよくわかり素晴らしい発表ができた。

6、実際に授業参観並びに所感

教室は、壁がなく、自由に位置、場所取りし、一年生の「私たちはたくさんの愛で囲まれている。」のユニットの発表授業を参観させていただいたが、自由で、明るく生き生きと自分の考えを交代でプレゼンしたり、意見や質問をして活発に発言する姿に感動しました。それでいて、上手にプレゼンできない児童には、アドバイスや丁寧に聞き取りをしたり、思いやりのある配慮をする児童もいて、IBの目指す学習者像が体現できている様子もうかがえた。子供たちはユニット学習が大好きで、人懐こく、自分のプレゼンを聞いてほしいと休憩時間に勧誘に来る児童もいました。IB教育の良さと地域や保護者の協力のもと実践できていること、子どもたちの成長の姿を通してIBの必要性を実感したところです。公立学校は異動があるため、IB教員養成やコストの問題から市内全校への導入は難しい課題となっているが、学習指導要領と親和性も高い、素晴らしい教育なので、IBの探究的な学びが広がっていくことを願うとともにとても参考となる視察研修でした。

「国際バカロレア教育」の取り組みについて

日時：令和7年5月29日(木) 13:00～15:00

場所：香美市立香北中学校(生徒数69名 1年25名 2年27名 3年17名)

学級数3, 特別支援学級1(自閉・情緒)

職員数15名(県費負担)、3名(他校からの兼務)

1、2022年令和4年12月国際バカロレアMYP認定校となる。

平成31年3月教育委員会から打診があり、高知国際高校が先立ち、IBを導入し、当時の香美市の教育長が、オーストラリアへ視察し、IB教育のすばらしさに感銘、地域性やコミュニティスクール、総合学習の確立もあって、大宮小学校に令和3年に導入し、令和4年香北中学校に、主体的自立した学びの探究の町として教育振興させるため、ワークショップも行い、IB教育を導入推進した。

2、授業内容について、IB教育とこれまでの日本の教育との違い

- ・例えば数学の授業では、数学を通してどんなことを学んでほしいか、ということに焦点をもって、授業をしていたが、実際にどうしたら数学を通して子供たちに何を学ぶのか、どんなこと、体験していくか、教科のため、点数を取ることの学びだけではない。概念理解、考え方見方を学ぶことができる。
- ・地域奉仕活動の取り組み…生徒が「行動」によって地域社会や人々の生活に貢献することを目指す。
- ・コミュニティプロジェクト…中学校3年間の集大成として、生徒自身の関心事や興味を出発点としてコミュニティに貢献するプロジェクトを立ち上げ、最後まで責任をもって取り組む。

プロジェクトの目標に共同作業で取り組み、共に奉仕活動を通じた学習を行いながら、プロジェクトの終わりにはグループとして、発表を行う。

3、導入前と導入後の生徒の変化について

- ・自分の考えを発表する機会が多いので意見をまとめる力が成長した。
- ・グローバルな視点が求められる、世界の出来事を探究する力が身についた。
- ・多様な視点で物事をとらえる力が身についた。

4、研究プログラム、授業の取り組み、その他について

- ・授業の進め方として切り口や視点をIBの視点を取り入れて、将来のどんな結果を描いてもらいながらチーム会議で理解、コーディネーターが相談や指導にあたる。
- ・IBの視点を取り入れた先生のアイデアを出し、実践し達成感を感じている先生もいる。
- ・教員の移動の問題がある。他の先生をどう巻き込んでいくか。

- ・生徒について 生徒主体で学習しているが、学習以外でも生活面で I B 的視点で行動に移せるようになる力をつける。
- ・地域との関わりについて 校内のみの学習だけでなく、社会との結びつき、課題解決に向けて学習活動につなげていく。
- ・先生が子供たちの楽しい学びの姿をみて喜び、子どもの笑顔を見れば、先生は変わる。生徒通しの話し合いを重要視している。
- ・ I B の 8 段階の評価と 5 段階の評価が難しい。
- ・成績や高校受験と保護者の理解について…アンケートの通りで、当初は反発も多かったが、年々賛成、肯定が多くなって、理解が進んできていると認識している。
- ・ I B に取り組むのに少人数の方が、やりやすいのは事実である。 I B の取り組み前と後で、不登校生徒の増減はなく、関連はないと認識している。

以上、香北中学校でも I B 教育の授業参観もさせていただき、グループで自由な雰囲気意見を述べあったり、端末で調べたり、それをまとめて、黒板に書き発表してみんなで結論づけていく。一事例を深く I B の視点で探求し、その事例の背景、その奥の流れについて意見を発表しあい、理解を深める。先生も一人ひとりの進捗具合で声をかけ、アドバイスしたり、グループの学習を促す。先生より生徒が活発に、自主的に、主体的に進行している様子であった。生徒のさわやかで元気な挨拶が I B の効果の表れでないかと感じる視察研修であった。

教育民生常任委員会 行政視察研修所感

委員名	石井 勢三
研修日程 令和7年5月29日(木)	
1. 研修先	
高知県香美市立大宮小学校 5月29日(木) 9:30 ~ 12:00	
高知県香美市立香北中学校 5月29日(木) 13:00 ~ 15:00	
研修目的	
国際バカロレア教育の取り組みについての先進事例視察のため	
研修所感	
<p>学校の教育として、これからの学校教育には、児童が様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決していくことや、様々さ情報を見極め知識の概念的な理解を実現し情報を再構成することができるようにすることが求められている。そこで、本校では、このような資質・能力を育むために、探究の学びを基盤とする国際バカロレア教育のプログラムを導入することとした。学習指導要領の内容をIB教育のフレームワークで捉え、本校独自のカリキュラムを実践することで「社会に開かれた教育課程」の実現を目指したいと考えている。</p>	
【大宮小学校の目指す10の学習者像】	
<ul style="list-style-type: none"> ・探究する人：私たちは、好奇心を育み、探究し研究するスキルを身に着けます。ひとりで学んだり、他の人々と共に学んだりします。熱意をもって学び、学ぶ喜びを生涯を通じて持ち続けます。 ・知識のある人：私たちは、概念的な理解を深めて活用し、幅広い分野の知識を探求します。地域社会やグローバル社会における重要な課題や考えに取り組みます。 ・考える人：私たちは、複雑な問題を分析し、責任ある行動をとるために、批判的かつ創造的に考えるスキルを活用します。 ・コミュニケーションができる人：私たちは、複数の言語や様々な方法を用いて、自信をもって創造的に自分自身を表現します。他の人々や他の集団のものの見方に注意深く耳を傾け、効果的に協力し合います ・心を開く人：私たちは、自己の文化と個人的な経験の真価を正しく受け止めると同時に、他の人々の価値観や伝統の真価もまた正しく受け止めます。多様な視点を求め、価値を見だし、その経験を糧に成長しようと努めます。 ・挑戦する人：私たちは、不確実な時勢に対し、熟慮と判断力をもって向き合います。ひとりで、または協力して新しい考えや方法を探究します。挑戦と変化に機知に富んだ方法で快活に取り組みます。 ・バランスのとれた人：自分自身や他の人々の幸福にとって、知性・身体・心のバランスをとることが大切だと理解しています。また、私たちが、他の人々や私た 	

ちが住むこの世界と相互に依存していることを認識しています。

- ・ 思いやりのある人：私たちは、思いやりと共感、そして尊重の精神を示します。人の役に立ち、人々の生活や私達を取り巻く世界を良くするために行動します。
- ・ 信念を持つ人：私たちは、誠実かつ正直に、公正な考えと強い正義感を持って行動します。そして、あらゆる人々がもつ尊厳と権利を尊重して行動します。私たちは、自分自身の行動とそれに伴う結果に責任を持ちます。
- ・ 振り返りができる人：私たちは、世界について、そして自分の考えや経験について、深く観察します。自分自身の学びと成長を促すため、自分の長所と短所を理解するよう努めます。

このような考えの下、IBのカリキュラムが進められている。研修のなかで、授業を見学させてもらいその中で、グループを作り積極的に発表をしている子供たちの姿に、ものすごい逞しさを感じた。発表している自分の内容をしっかりと聞いてほしい様子を感じられる。先生の授業を聞いている今までのイメージと、大きく変わっている。また、中学校ではタブレットをしっかりと活用し、自分が感じたこと、発見したこと、などを黒板に書き、ワークショップ的なイメージの授業を行っている。子供たちが将来社会に出て生きていくための探究、考え、行動を育むための基礎練習のようなものを感じた。

また、このようなシステムに少しずつ変えていくための、周りの理解と知識を得るためには、相当苦勞をしたものと感じられた。先生方の転勤等で、入ってこられる先生には戸惑いもあられが、IBの考え方に理解をされ、協力的に進められている。

今回の研修において、実際の授業内容を見て、必要性を強く感じた。非常に参考となった。

教育民生常任委員会 行政視察研修所感

委員名

近藤 武

1. 研修日程 令和7年5月29日
2. 研修先 高知県香美市立大宮小学校及び香北中学校
3. 研修目的 国際バカロレア教育の取り組みについて
4. 研修所感

【研修概要】

高知県香美市にある学校で実施されている IB（国際バカロレア）教育の PYP（初等教育プログラム）と MYP（中等教育プログラム）の取り組みについて所感報告をする。

探究学習の考えをオーストラリアの姉妹都市学校が取り入れていたことがきっかけで、IB 教育に関心を持ったことで香美市の取り組みが始まった。

「重点的な取り組み」

1. 主体的な学びを促進すること
2. 一貫教育の強化（大学附属学校のような継続的な学び）
3. 概念理解と振り返りを重視した教育の推進
4. 授業の質向上と生徒の自立的な活動
5. 地域活動としてコミュニティプロジェクトや奉仕活動を実施し、グループ発表を通じた振り返りなどが主な取り組みである。

「成果」

- ・生徒アンケートの結果によると、IB 教育を通じて次のような力が向上したことが分かった。
1. 自分の考えを発表し、意見をまとめる力の向上
 2. グローバル視点の強化（世界の出来事を探求する力）
 3. 多様な視点から物事を考える能力の成長
- などがみられた。

「課題と今後の方針」

令和7年度には、次の点が重点課題として挙げられている。

1. 基礎学力（知識・技能）の定着
2. モジュール活用による効果的学習支援
3. IBの浸透とIB校としての誇りの醸成
4. 生徒のコミュニケーション能力の育成
5. 社会教育との連携強化（投票や政策理解などの活動）

「質疑応答の主な内容」

1. 導入後の教師の意識変化について、数学教師からは「IB教育のおかげで理想的な教育ができるようになった」との声。
2. 学習指導要領との関係性について、大きな違いは感じられず、だが技術・家庭科の適用が難しい点が課題である。
3. 授業における生徒の主体性育成について、教師のファシリテーション能力の向上が重要であるとの認識。
4. 公立中学校におけるIB教育の効果について、学力向上はあるが、学力差や評価の難しさが課題であるとのこと。
5. 不登校とIB教育の意義について、主体性が育っていれば不登校の問題は少ないとの見解である。

（まとめ）

香美市ではIB教育を地域の学校に導入し、生徒の主体的な学びとグローバルな視点を育てることに注力している、一方で学習指導要領との整合性や学力格差の課題もあるため、今後の改善が求められる。

地域との結びつきについては香美市では、地域活動やコミュニティプロジェクトを積極的に取り入れ、これは地域の文化や社会課題を学びに活かすことを目的としており、他の地域ではIB教育が国際的な視点に重点を置く傾向もあり、地域との結びつきを強くするには、香美市のこの取り組みについては本市も積極的に取り入れたい内容であった。

導入には、予算や教職員の負担など抱える課題は多いが本市生徒たちの可能性を広げるためには取り組んでおきたい教育方法であると学んだ。